

[体育・保健体育]

多様な動きを生み出す力を育てる小学校高学年「表現運動」

－動きを考える視点を取り入れた実践を通して－

澤野 太郎*

1 主題設定の理由

表現運動に対して、困難さを抱えている指導者や児童が多いと感じる。学習指導要領の第5学年及び第6学年の内容には、「題材の特徴を捉え、表したい感じやイメージを強調するように、動きを誇張したり変化を付けたりしてメリハリ（緩急・強弱）のあるひと流れの動きにして即興的に表現したり、グループで変化と起伏のある『はじめ－なか－おわり』の構成を工夫した簡単なひとまとまりの動きにしたりすること」とある。しかし、指導者は児童をどのように動かせばよいか、児童はどのように動けばよいかということがわからないということが困難さを生む要因と考える。

指導者の困難さについて、「『表現運動』を指導する際の困難さについて－千葉県小学校教員の調査から－」（寺山、2007）では、指導者が授業中に困難に感じていることとして、「学習者への対応」「動きの引き出し方」「指導言語など」があげられている。さらに、『動きの「感じ」と「気づき」を大切にしたい表現運動の授業づくり』（細江・鈴木・成家・細川・山崎、2014）では、平成22年12月～平成23年1月に行った表現運動に関する教員の意識調査の結果によると、表現運動の授業を実施する中での問題点として、動きを広げる有効な手だてが難しいとする記述が多くあげられている。表現運動では、授業イメージの希薄さから「どんなことをすればよいのかわからない」という、他の領域にはない難しさが指摘されているのである。

児童の困難さについて、表現運動における実態を把握するために、在籍校5年生（令和元年度）の児童47名を対象に意識調査を実施した。「表現運動は難しいですか」という質問項目では、「とても思う」「少し思う」と答えた児童が23名（48.9%）であった。その理由として、「どう動いてよいかわからない」「題材に合う動きが思い浮かばない」という内容が多かった。このように、児童にも、動きを考えることに困難さを感じているという実態があった。

このような実態から、題材の特徴に合わせた動き方のイメージをつかみやすく、かつ、多様な動きを生み出したり、動きの幅を広げたりしやすくする「視点」を設けることが、難しさを乗り越えるために有効であると考えた。具体的には空間性（場所、高低など）や時間性（遅速、連続と静止など）に着目し、【高い－低い】【速い－遅い】などの対極を意味する言葉を与えたり児童から引き出したりすることである。本研究では、この言葉を「動きのコツ」と呼ぶこととした。

2 研究の目的

小学校高学年の表現運動において、表現する題材に合った多様な動きを生み出すために、動きを考える視点（動きのコツ）を取り入れることの有効性を明らかにする。

3 研究の構想

(1) 対象

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 対象1：新潟市公立小学校5年生（令和元年度） | 1組23名（男子：13名 女子：10名） |
| | 2組24名（男子：13名 女子：11名） |
| 対象2：同小学校5年生（令和2年度） | 1組21名（男子：11名 女子：10名） |
| | 2組24名（男子：12名 女子：12名） |

*新潟市立笹口小学校

(2) 授業構想

本研究では、5年生の学級体育で実践を行う。対象1では、どちらの学級にも動きのコツを取り入れ、児童の動きの変容を観察する。追研究となる対象2では、動きのコツの有無によって児童の表現方法にどのような違いがあるかを検証するために、1組には動きのコツを取り入れずに行い、2組には動きのコツを取り入れて行う。

また、単元前と単元後にアンケートを実施し、児童の実態の変容を分析する。それぞれの質問に対して、「5：とても思う」「4：少し思う」「3：どちらでもない」「2：あまり思わない」「1：まったく思わない」の5段階評定尺度法を用いて回答を求める。なお、「5：とても思う」「4：少し思う」の評定尺度を肯定的と捉える。

表1 アンケートの質問項目

質問項目	評定	アンケート実施時期
1. 表現運動は好きですか。	5・4・3・2・1	単元前、単元後でそれぞれ共通の項目
2. 表現運動は楽しいですか。	5・4・3・2・1	
3. 表現運動で動きを作ることは好きですか。	5・4・3・2・1	
4. 表現運動で動きを作ることは楽しいですか。	5・4・3・2・1	
5. 題材に合った動きがわかりますか。	5・4・3・2・1	
6. 動きのコツがあることで、題材に合った動きがわかりやすくなりましたか。	5・4・3・2・1	単元後での追加項目 (対象2の1組は除く)
7. タブレットで撮影し、自分たちの動きを見ることは、動きを作る中で参考になりましたか。	5・4・3・2・1	単元後での追加項目 (対象2のみ)

(3) 授業の工夫

① 心と体をほぐす運動

単元を通して、授業の始めに「なってみよう！○○」を行う。この活動は、手拍子のリズムに合わせて歩き、リズムの途中で指導者が提示した題材を即興的に表現する活動である。提示する題材は、特徴が捉えやすく動きのコツを取り入れることができる題材にする。

② 単元名と表現する題材

単元名を「大変だ！○○」とし、○○に入る題材を想像させ、生活編・自然編・社会編の3つのグループに分ける。本単元で取り扱う中心的な題材は、自然編の中から激しい感じの題材や群が生きる題材を選び、それらの題材の特徴に合った動きをすることで、変化や起伏のある動きや群が生きる動きを体得することを目指す。

③ 動きのコツを可視化

授業の中では、動きのコツをカードにして可視化する。動きのコツが書かれたカードは常に児童に見えるように掲示し、そのカードを見ながら題材に合った動きを考えさせる。授業を進めていく中で新たに出てきた動きのコツはカードにして追加する。変化や起伏のある動きになる動きのコツと群が生きる動きになる動きのコツのカードは色分けをする。

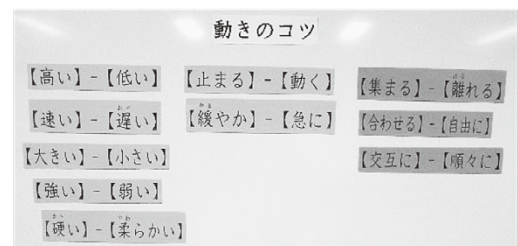


図1 「動きのコツ」カード

④ 人とのかわりを生む工夫

1グループが5名程度となるように児童をグループ分けし、話し合ったり動きを見合ったりして動きを考える。その際、グループのメンバーが動き方や動きのコツを共有できるよう、動き方と動きのコツを書き込めるグループカードを用いる。

⑤ タブレットで自分たちの動きを撮影して見返す（対象2のみ）

グループで作った動きをタブレットで撮影した後、動きのコツを視点として客観的に動画を見直し、動きを作り直す。作り直した動きを再度撮影し、動きを比較する。なお、対象1では、グループで互いに動きを見合い、良いところを伝えたりアドバイスをしたりする活動を行う。



図2 タブレットで動きを撮影する様子

(4) 単元構成

表2 単元全体の計画(全6時間)

時	○学習のねらい ・主な学習内容	取り扱う動きのコツ
1	○動きのコツを使って身近なものを表現することができる。 ・身近なものを題材にして表現する。 ・動きのコツについて理解する。 ・動きのコツを取り入れて同じ題材をもう一度表現する。	【高いー低い】【速いー遅い】 【大きいー小さい】 【強いー弱い】 【硬いー柔らかい】 など
2 ↓ 3	○変化や起伏のある動きを入れ、ひと流れの動きで表現することができる。 ・教師のリードで急変する場面を入れながら即興的に表現する。 ・既習の動きのコツを取り入れながら、題材に合った動きを創造する。	【止まるー動く】 【穏やかー急に】
4	○群が生きる動きを入れ、ひと流れの動きで表現することができる。 ・教師のリードで急変する場面を入れながら、群が生きる動きを効果的に入れて即興的に表現する。 ・群が生きる動きに既習の動きのコツを取り入れ、題材に合った動きを創造する。	【集まるー離れる】
5	○変化や起伏のある動きと群が生きる動きを入れ、「はじめーなかーおわり」のひとまとまりの動きを作ることができる。 ・【集まるー離れる】以外の群が生きる動きについて知る。 ・グループで好きな題材を選び、「はじめーなかーおわり」で題材に合ったひとまとまりの動きを考える。	【合わせるー自由に】 【交互にー順々に】
6	○前時までにグループで作った動きを発表することができる。 ・グループで作った動きを見せ合い、感想を出し合う。 ・単元のまとめをし、学習を振り返る。	

4 指導の実際と考察

(1) 対象1

① 第1時の実際

授業の始めに、「大変だ！○○」からイメージする言葉を出させ、それらを生活編・自然編・社会編の3つのグループに分けた。その後、身近なものを題材として取り上げ、「なってみよう！○○」で自由に表現させた。

例えば、ジェットコースターでは、手を上下に動かしながら走ったり、体をひねったりする児童がいたものの、ただ走り回る児童がほとんどであった(図3)。その他の題材でも同様に、題材の特徴を捉えた動きをする様子は見られなかった。自由に表現させた後、動きのコツを取り入れることで、より題材の様子を表現できるようになることを伝え、【高いー低い】【速いー遅い】【大きいー小さい】【強いー弱い】【硬いー柔らかい】などが使えそうであることを確認した。そして、同じ題材をもう一度表現したところ、ジェットコースターでは、背伸びをして手を高く上げ、手を下げると同時に体全体も低くするなど、動きの幅に広がりができた(図4)。さらに、【高いー低い】以外にも【速いー遅い】が使えるという児童の気付きから、速度に変化をつける児童もいた。動きのコツを取り入れて動きに差をつけることで、多様な動きが生まれるなどの変容が見られた。



図3 動きのコツを取り入れる前



図4 動きのコツを取り入れた後

② 第2時から第3時の実際

第1時でグループ分けした自然編の題材の中から、第2時は「津波」、第3時は「台風」を選んで表現した。この題材を選んだ理由は、題材を表現する動きの中に静と動を加える場面や緩急を付ける場面があるからである。その様子をひと流れの動きで表現することで、変化や起伏のある動きになるのではないかと考えた。

まずは、題材から想像される様子について話し合い、その題材に合った動きを考えた。そして、その動きに動きのコツ【止まる－動く】【穏やか－急に】を入れ、教師のリードに合わせて急変する場面を表現する。

第2時の「津波」では、波が引いてから津波になって襲ってくる場面に【止まる－動く】を入れた。波が引いて襲ってくる前に動きを止め、津波になって襲ってくる時に一気に動いて津波の急変する様子を表現した。

第3時の「台風」では、風が台風になる場面と台風が去って風に戻る場面に【穏やか－急に】を入れた。穏やかな風が吹いている様子を手や体を使って表現し、台風が近付くにつれて徐々に動きを大きくしていき、台風になるところで急に動きを変える。そして、台風が去った後は穏やかな風に戻る様子を表現した。

グループに分かれてそれぞれで動いたり話し合ったりして動きに工夫を加える際、どちらの題材でも【速い－遅い】や【大きい－小さい】など、その他の動きのコツを取り入れながら題材に合った動きをしていた。



図5 波が引いて【止まる】場面



図6 津波になって一気に【動く】場面

③ 第4時から第6時の実際

第4時では、自然編の題材の中から「火山」を選んで表現した。この題材を選んだ理由は、火山が噴火する様子を表現する際、複数人で表現した方がより激しく噴火する様子が表現できると考えたからである。第3時までと同様に題材の動きを考えていく中で、火山が噴火する様子は複数人が離れながらジャンプすることでより激しくなることに気付いた。離れるためには集まる必要があり、群が生きる動きのコツ【集まる－離れる】を動きの中に取り入れるとより題材に合った動きができることがわかった。さらに、集まる時や離れる時にも他の動きのコツを取り入れることで多様な動きが生み出されたり、動きの幅が広がったりする様子が見られた。

第5時では、【合わせる－自由に】【交互に－順々に】なども群が生きる動きのコツであることを確認した。また、台風では手をつないで回ったり同じ方向に走ったりすることで、合わせる動きを取り入れることができるなど、群が生きる動きは他の題材でも取り入れることができることに気が付いた。その後、グループごとに好きな題材を選んで「はじめ－なか－おわり」のひとまとまりの動きを作り、第6時にそれぞれのグループで作った動きを見せ合った。



図7 【集まる】様子



図8 【離れる】様子



図9 台風の【合わせる】様子

④ 単元前後のアンケート結果の比較

単元前のアンケートでは、質問1と質問2の結果から、表現運動に対して肯定的に捉えている児童が半数程度であることがわかった。また、質問3と質問4の結果から、動きを作ることにに対しては6割程度が肯定的に捉えていることがわかった。質問5については、単元前のアンケートだったので、題材を提示された時にその題材に合った動きが思い浮かぶかどうかを尋ねたところ、肯定的評価は57.4%であった。この項目により、動きを考えるための視点である動きのコツ

ツを取り入れることでどのように変容するのかを評価する。

単元後のアンケートでは、質問5に対する肯定的評価が57.4%から89.4%へと変容した。さらに、質問6に対する肯定的評価が97.9%であったことから、児童にとって動きのコツがあることで、題材に合った動きがイメージしやすくなることがわかった。そのことに加え、質問1～4の結果を見ると、表現運動に対して肯定的に捉えている児童の割合や、動きを作ることにに対して肯定的に捉えている児童の割合も増えていた。

表3 対象1のアンケート結果(肯定的評価の割合)

質問項目	単元前	単元後
1. 表現運動は好きですか。	46.8%	83.0%
2. 表現運動は楽しいですか。	61.7%	91.5%
3. 表現運動で動きを作ることは好きですか。	59.6%	80.9%
4. 表現運動で動きを作ることは楽しいですか。	61.7%	80.9%
5. 題材に合った動きがわかりますか。	57.4%	89.4%
6. 動きのコツがあることで、題材に合った動きがわかりやすくなりましたか。		97.9%

(2) 対象2

① 第1時から第6時の実際

動きのコツの有無による効果を比較するために、1組では動きのコツを取り入れず、2組では動きのコツを取り入れて授業を行った。授業の進め方は、タブレットで自分たちの動きを撮影して見返す活動を入れたこと以外は対象1と同様にした。

動きのコツを取り入れた2組では、対象1と同様に動きを考える視点を与えたことで多様な動きが生み出されたり、動きの幅が広がったりする様子が見られた。さらに、タブレットで撮影した自分たちの動きを見返した後、「もっと速く走った方がいい」「体をもう少し低くしよう」など、動きのコツをもとにグループで話し合い、自分たちの動きに新たな工夫を加えて動きを考えていた。

一方、動きのコツを取り入れなかった1組では、題材に合った動きはできていたが、周りの児童の動きを見ながら動いている様子が見られ、どの児童も似たような動きになっていた。また、グループで動きを考える場面では、どのように動きに工夫をすればよいかかわからず、考えることに時間がかかったり動けないでいたりする様子であった。さらに、打ち上げ花火とポップコーンのように動きが似た題材では、どちらの題材でもジャンプを繰り返すだけになってしまうなど、題材に応じた動きに差が見られなかった。

② 児童の振り返り

動きのコツを使って動きを考えたことやタブレットを使って動きを撮影して見返す活動について、単元終末の児童の振り返りには以下のように書かれていた(図10, 図11)。動きのコツがあることで、題材に合った動きが考えやすくなり、動きを見返した際の着目する視点になったりすることがわかった。

今回、「大変だ!○○」をして、最初はずまく表現できなかったけど、動きのコツを使うと動きが考えやすくなり自分のイメージ通りに動くことができました。

図10 動きのコツについて

津波を表現するためには、少しずつ波を大きくしながら、後ろに下がって一気に波がおしよせるようにしました。動画をとって見てみると、おしよせる前に、しっかりと止まり、もっと速く走った方がいいなと思いました。

図11 動きを撮影して見返す活動について

③ 単元前後のアンケート結果の比較

単元前のアンケートでは、対象2は1組と2組で多少違いはあるが、表現運動に対して肯定的に捉えている児童の割合、動きを作ることに肯定的に捉えている児童の割合、題材に合った動きがわかる児童の割合は同様の傾向にある。この結果を基準とし、動きのコツの有無によってどのように変容するかを検証した。

単元後のアンケートでは、質問5について、1組では38.1%から61.8%、2組では45.8%から91.7%と、どちらの学級でも肯定的評価の上昇があったが、2組の方が上昇した値が高い。このことから、題材に合った動きがイメージしやすくなるためには、動きのコツを取り入れることが有効であると考えられる。さらに、2組の方が表現運動に対して肯定的に捉えている児童の割合や、動きを作ることに肯定的に捉えている児童の割合が全体的に増えていた。

また、質問7ではどちらの学級でも肯定的評価が高かったことから、表現運動において、タブレットで撮影し、自分たちの動きを見ることは、動きを作る上での有効な手だてであると考えられる。

表4 対象2のアンケート結果(肯定的評価の割合)

質問項目	1組(動きのコツなし)		2組(動きのコツあり)	
	単元前	単元後	単元前	単元後
1. 表現運動は好きですか。	28.6%	57.1%	45.8%	91.7%
2. 表現運動は楽しいですか。	52.4%	76.2%	62.5%	95.8%
3. 表現運動で動きを作ることは好きですか。	42.9%	57.1%	45.8%	83.3%
4. 表現運動で動きを作ることは楽しいですか。	47.6%	57.1%	50.0%	91.7%
5. 題材に合った動きがわかりますか。	38.1%	61.9%	45.8%	91.7%
6. 動きのコツがあることで、題材に合った動きがわかりやすくなりましたか。				100%
7. タブレットで撮影し、自分たちの動きを見ることは、動きを作る中で参考になりましたか。		85.7%		100%

5 成果と課題

(1) 成果

「4 指導の実際と考察」に記述したように、動きのコツを取り入れることで、多様な動きが生み出されたり動きの幅が広がったりするなど、児童の動きが変容する様子が見られた。対象1(動きのコツあり)の単元後のアンケートと対象2の2組(動きのコツあり)の単元後のアンケートともに、表現運動に対する肯定的評価は上昇する傾向が見られた。対象2の1組(動きのコツなし)では、単元の前後で動きのコツありと比較して数値の上昇が低かった。これらのことから、題材に合った動きをイメージしやすくするためには、動きのコツを取り入れることが有効であると考えられる。

また、単元終末の児童の振り返りからも、動きのコツがあることで、題材に合った動きが考えやすくなったり動き方がわかるようになったりしたことが確認できた。

さらに、対象2の単元後のアンケートや単元終末の児童の振り返りから、タブレットで撮影して自分たちの動きを見ることで、動きのコツを取り入れて動きを考える視点を与えることの効果がより一層高まることがわかった。

以上のことから、小学校高学年の表現運動において、表現する題材に合った多様な動きを生み出すために、動きを考える視点(動きのコツ)を取り入れることは有効である。

(2) 課題

本研究では、動きのコツという動きを考える視点を設定したが、【速いー遅い】のように状態を表すための動きのコツ、【硬いー柔らかい】のように質感を表すための動きのコツ、【集まるー離れる】のように動き自体を表す動きのコツという3種類を混同していたので、動きのコツの分類が必要であると感じた。また、小学校高学年の表現運動を対象として実践を行ったが、他の学年でも動きのコツが多様な動きを生み出すための視点になるのかということについて、今後検証を進めていきたい。

6 参考文献

- 全国ダンス・表現運動授業研究会『明日からトライ! ダンスの授業』大修館書店, 2011年
- 寺山由美『『表現運動』を指導する際の困難さについてー千葉県小学校教員の調査からー』『千葉大学教育学部研究紀要』第55巻, 2007年, 179~185 pp
- 細江文利・鈴木直樹・成家篤史・細川江利子・山崎大志『動きの「感じ」と「気づき」を大切にしたい表現運動の授業づくり』教育出版, 2014年
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 体育編』東洋館出版社, 2016年